

卯の花くたし

作・加賀屋

淳

【時】

2076年5月の午後。

【ところ】

秋田市・大町 川反中央ビル一階 ココラボラトリ一。

この作品の上演会場も同じココラボラトリ一。

【登場人物】

小川正隆	会社員	演・加賀屋淳
榎原禄郎	美大准教授	演・山田賢一
山口メイ子	現代美術作家	演・佐藤らん子
佐藤麻由子	椅子女。実は、つまみ細工作家	演・なみぎしちか

開場中。

寂し気な雨音である。

寂し気な雨音が続いている。

秋田市の中心地・大町にあるギャラリースペース・ココラボラトリ。

部屋の真ん中には小さな椅子(通称・とうふイス)が4つほど雑然と置かれている。そのうちの1つに五弁の花をモチーフにしたかぶり物をかぶった女が一人座ってなにやら手芸のような手作業をしている。女はかぶり物以外は「くじく普通の服装をしている。

女は小さく何かをずっとつぶやきながら手を動かしている。

椅子に座った女

しとしとしと…しゃばしゃばしゃば…さらさらさら………

その周囲には塗装用のローラーやベンキのトレーなどが散らばっている。すべてよく使いこなされている。

定刻。

いちいち書くのが面倒なので、"椅子に座っている女"・"椅子に座っている女"は、このあと本名が発覚するまで"椅子女"としよう。

ココラボラトリ入口の金属ドアが開閉する音。

入口からの女の声 どうもー……。

椅子女 はーい。

入口からの女の声 誰かいませんか……？。

椅子女 いないよー。

ト、入り口から眼鏡をかけた女が一人入ってくる。長めの髪に黒のシックなトップスと黒の長めのスカートに身を包んでいる。片手に大きめのキャンバストートバッグ。一見して異質な雰囲気が漂っている。

女は山口メイ子という。

誰かを探している風の山口。それにもかかわらず椅子女は黙々と手作業を続いている。

山口、ギヤラリースペースを見回す。足許に転がるペイントローラーをふと見つけ、おもむろにそれを手にする。

満面の笑みの山口。縦横無尽に色を塗るように空くうにローラーを走らせる。

その様は無邪氣そのもの。

突然何が始まったのか、といった『は?』な視線で山口を凝視する椅子女。

山口 (満面の笑みで)フフフ、ハハハ、ハハハハハ…。

ト、突然なにかにビクッと反応。

メガネのフレームをダブルタップして、目前の空をタイピングするようにタップする。

山口 なんだよー。

苛立つたため息をつき、出口から出ていこうとするがふと振り返り椅子の方を見て、

山口 ヒーツツツ!!

ト、椅子女にじりじりと近づきじつと見つめる。さらに椅子女の周りをまわって360度からじつと見つめてみる。椅子女の頭の上で恐る恐る手を動かしたりする。ちょっと離れて、

山口 …なにこれ？ 浮いてる…。…どういう仕掛け？（限りなく顔を近づけて）…うわっ、気持ち悪っ !!

山口、飛び出していく。

椅子女 やかましいわ、不審者めが !! つたく !!

しばし静寂。

ト、再びココラボラトリーカーの金属ドアが開く音。

二人の男が賑やかに会話しながら部屋に入ってくる。

一人の男は小川正隆という。もう一人は榎原禄郎という。

小川の服装は礼服。ネクタイは黒。片手に小さな紙バッグ。もう片方にはセカンドバッグ。小川は会話の途中、時折、胃をおさえるしぐさを見せる。一方、彼よりもやや若い男が榎原。彼は使い捨ての化学防護服を着て登場。

小川  
榎原

榎原先生、なかなかシユールでしたよ。神社の前に腰かける全身防護服姿の男。  
ハハハ。休憩にはちようどいい場所だもんね。（軽く匂つて）ん…？

ト、榎原、匂いの記憶をたどり軽く思案する風。

小川  
榎原

あ、榎原先生が書かれた『仮住まいの世』の二枚組の絵、会社にちゃんと飾らせてもらつてます！  
ああ…。すみません、あんな落書き買わせちゃつて…。ほんと、申し訳ない。

ト、深々と頭を下げる。

小川  
榎原

いや、素晴らしい作品だったから買わせていただいたんです。  
いやいや、恥ずかしい。

小川  
榎原

いや、先生の作風好きなんですよ、美術、美術してなくて…、  
それ、ほめてます？

もちろんです！

小川  
榎原

小川社長のその言葉、素直に受け止めます。どうも。（頭をペコリと下げる）  
いやいや、私、社長じやないんです。いつも事務所でこんな雰囲気漂わせているものですからよく言われるん  
でけど、ただの社員です。

いくらなんでも『ただの社員』ってわけないでしょ。

いや、ほんとの平社員です。  
じやあ社長は？

小川 私の伯父貴の会社なんです小川建築工房は。先生が来られた日は出張中の伯父貴の代理で対応させていただきました。

小川 ふうーん。

小川 ；でも、もし私なら、もっと大きい絵買つてたのになあ。

小川 榊原 実はオレ、大きい絵描けないんですよ。手慰み程度に(手で大きさを表して)このくらいのちつちやいやつチマチマツと書くのが好きで。

小川 へえ。

小川 榊原 まあ、絵つて言つても舞台の正面図だと平面図の延長線上にあるマンガ図みたいなもんで。逆に大きいの描くとボロが出るんですよ。

小川 またまたあ。

小川 榊原 いや、ホント。買つてくれるつていうから無理やり値段付けたくらいなんで。

小川 榊原 でもあの絵、安過ぎです。私だつたらあの値段の倍は出すけどなあ。

小川 榊原 そこ。だからこそ社長は堅実な会社経営ができるんだと思うんですよ。

小川 榊原 どういうことですか？

小川 榊原 『榊原の絵なんて投資の対象にすらならない。そのあたりの壁にチョコンと飾つておくぐらいがちょうどいい。そのレベルであれば出せる金はこのくらいだ』って社長は直感的に判断できる。

小川 榊原 そうですかねえ。

小川 榊原 うん。そういう意味で社長は経営感覚だけじゃなく審美眼も優れてると思うんですよ。

小川 榊原 どうかなあ。

小川 榊原 そういうアートとカネのバランス感覚にシビアである」とつてアートマネージメントの世界じやイロハのイイですかね。

小川 はあ…。

小川 榊原 あ、小川さんのこと責めてるわけじゃないからね。そういう感覺も経営には必要だつていう、まあ、一般論と

してね。

小川

：

間。

もともとオレの専門つて舞台芸術とアートマネージメントなんですけど、ええ。

美大に来た年、お披露目みたいな感じで新任教員たちがこれまでの仕事で制作した作品集めて展示やるから、つて言われて、あわてて昔手掛けた舞台作品の模型だとか、図面引つ張り出してきて展示してもらいましてね。

私もその展示見て先生のこと知ったんです。

あー、そうだったんですね。

我々もお客様との打ち合わせで家の完成予想図をお渡しするんですけど、なかなかそのイメージを伝えるのが大変で。

うんうん。

先生の書かれた舞台装置の絵つてものすごく臨場感があるというか、世界観が伝わってきて、見ているだけでワクワクしてきたんです。

それが舞台をプロデュースする人間の一番の仕事でもあるんですよ。

というと。

演劇とかショーとか大きい装置組むような舞台はスタッフとか出演者に早いうちに作品の世界観を共有してもらわなきやなんない。だから理解してもらいやすいように舞台模型作つたり舞台図を描く。

ええ、そうですね。

もともとこの手の図面つて身内向けの内部資料でしょ。表に出すもんじやない。

小川

榎原  
小川  
榎原

小川  
榎原  
小川

小川  
榎原  
小川

小川  
榎原  
小川

小川

そうですね。なんか、特別な世界の裏側をそつと見せてもらつたような感覚がありました。

そこがウケたんでしょうね。それからやたらと舞台装置図風の絵描く仕事もらつちやつて。面白いもんですな。秋田に来られたのはどういうきつかけで。

ああ、美大に舞台芸術学科が出来て二年経つた年に菅沢さんから教員やらなかつて誘われましてね。

あの菅沢教授？ 舞台俳優出身の。

そう。オレ、若い頃からガサさんが出てる舞台に裏方で参加してて。

我々仲間内じや彼のこと、『ガサさん、ガサさん』って呼んでるんですよ。

ス『ガサ』ワだから。

つていうか、あの人ガサツだから、ガサツのガサさんつていうのがあだ名の由来みたいだけど。

ずいぶん長いお付き合いなんですか。

まあ、舞台の作法、社会の礼儀、業界の義理人情、いいこともちょっと悪いこともいろいろ教えてもらつたわけですよ。オレにとっちゃ兄貴みたいな存在でね。

へえ。

自分の受け持つてる学科の中をもうちょっと充実させたいから、力貸してくんねえかって言われてね。

それで、教職の表舞台に。

教職なんて表舞台じやないですよ。学生の人生のための裏方が影の黒幕みたいなもんですよ。未来を背負う人間に希望を託す手伝いをすることです。あくまで我々の役目は。…ちょっとカッコつけすぎたかな、ハハハ。いやいや。

ト、榎原と小川、同時に椅子に腰かけ、

小川・榎原 どっこいしょっと。はあーっ…。

二人、顔を見合わせ、笑う。

小川、壁から天井、床と、ギャラリースペース全体をぐるっと見まわす。

小川、椅子女に気づき会釈。会釈を返す椅子女。

小川、椅子女をじっと見つめ、

小川  
椅子女  
：マチ？

小川  
椅子女  
ん？

小川  
椅子女  
あ、すみません。人違いでした。

（小川にはい？

榎原、小川の視線の先に気づく。椅子の方を振り向き、

あー！ こんなとこに置いてたら汚れるじゃねーかよ。

ト、椅子女のかぶり物をポンと取り、

椅子女  
あ。

小川  
椅子女  
ちよつちよつちよつ！

榎原  
大事なもんなんだからもつと丁寧に扱えつっんだよ…。

ト、かぶり物を思いつき乱雑に扱いながら、スタッフルームの方に持っていく榎原。

小川  
（榎原に）先生、ちよつと!! （椅子女に）大丈夫、ですか？

(まあまあ、気にしないで、という風に対応し小川の下手側椅子に移動する。)

小川 言つてることとやつてること真逆じやないですか。自分がガサツなんじやないの。  
椅子女 慣れっこだから。

小川 椅子女を見て)…あの、すみません。…もしかして、マチの親戚の方とかじや。  
椅子女 え。

小川 ああ、いや、人違いますね。最近視力も悪くなってきて…、  
椅子女 でも見えるんでしょ、私のこと。

小川 はい、ちゃんと。  
椅子女 ほう…。(ト、やけに納得。)

戻つてくる榎原。小川の周辺を凝視し首をかしげる。

榎原 あれ? 台、寄せました?

小川 台?

榎原 (自分の頭のあたりで、手を使ってかぶり物の形を再現し)あれの。

小川 小川 榎原 なんのことですか。

榎原 かぶり物が乗つかつてた台。

小川 小川 榎原 いや、台に乗つかつてたとかじやなくて、この方がかぶつてたのを…、

椅子女、この二人のやりとりの間に手作業をしながら、そそくさと旭川側のバックヤードにハケている。

小川 あれ? どこいった?

どこいったんだろ。小川さんが寄せたんじゃないんですか？  
人のことを“寄せた”なんて言っちゃ失礼ですよ。

(気おされて、)ああ…すみません。いや、私と小川さんしかいないから、展示台片付けてくれたのてつきり小川さんかと思って。

はい？

え。

いまいた方がかぶつてたの先生が脱がして持つていったから。  
：は？

あたりを見回す榎原。

誰が？

(周りを見回し)…えっとお…、

…なになに、気持ち悪いなあ。…小川さん、ちょっとビビらせないでよお。  
そんなんじやないです。

ま、いいか。気分変えて、作業再開、再開い。

今日はなにか？

このギャラリーの壁と床の補修とペンキ塗り。

ペンキ塗り？

明後日、“モリ森尾”の作品搬入があるもんで。

え、あの炎上系アーティストのモリ！？

あー、今はすっかりそれで有名になつちやいましたね。オレのダチなんですよ、あいつは。  
うわあ、モリさんとお友達なんですね。スゴイ！

榊原

モリ "さん" って。ハハ。年が違うんだけど同じ大学の出身で腐れ縁のダチで。あいつなんてただのキワモノ  
製造機ですよ。この間ここ下見に来てたんですけどここに入つてくるなり、「あちやー、壁の汚れが気にな  
るなあ、この床の剥がれもうちょっとどうにかならんか」ってごちやごちや言い出して。

いかにも芸術家ですね。

ワガママなだけですよ。で、そのこと橋本に話したら(橋本の口調で)「はい。じゃ、やりますか。」って。

ハハハ、似てる似てる!

いくら橋本がココラボのオーナーで管理人だからって言つても、ヤツだけにやらせるのは気の毒だし、ここに  
森尾を紹介したオレの責任もあるもんで、手伝いに来たんです。

なるほど、それでその恰好なんですね。(入り口方向に目を遣り)でもベンキ乾きますかね、この天気で。

雨の音。

大丈夫、…でしょ。…つか、橋本どこまで行つたんだよ?

ト、榊原立ち上がり、床に転がつて塗装用品を物色し始める

ちよつと飲み物買つてくるって言つて飛び出してかれこれ三時間だよ。

私もここ来る前、橋本君に連絡してからと思つてLINEしたんですが、既読もつかないし電話しても全然連  
絡付かなくて。

あれでよくこここのオーナー務まつてるよなあ。

うーん。後藤さん、石田さん、大場さんって三世代の偉大なココラボオーナーの時代見てるから橋本君のあの  
マイペースっぷりはねえ…。

一昨年、金沢に行つちゃつた大場君は社交的でフットワーク軽くて仕事も早かつたから、なおさら橋本の個性

榊原

小川 榊原

小川 榊原

榊原

小川 榊原 小川

がマイナス方向に際立つちやつてんだよなあ。

オーナー歴三年目のわりに橋本君ちよつとねえ：ヤツも、雑なんだよな。世の中雑な奴ばつかだよ。

いやまあ…。

オレが秋田の美大で関わった学生の中で群抜いて橋本が一番雑のバカツつーだよ。

あ、遠州弁で“バ力野郎”的こと。

そこまで言わなくても。

言わなきやわかんないんですよヤツは。  
ま、言つてもわかんねーけど。…うーん、作品作る体力も精神力もセ  
ンスもあるんだけどな。

ト、頭を搔く榎原。

あの…、遠州弁つて、静岡の？

ええ。静岡でも大井川から西の地区的言葉ですけどね。

秋田出身じゃなかつたんですか、先生？

高校卒業までは秋田市で大学からはすと沢松8年前に繰めて秋田公立美大に

ええ。

…浜松つていうと…大丈夫でしたか、7年前の震災？

向こうには親族いないんで。

このやり取りの合間に、椅子女は廊下から出てきて二人の間を手刀を切りながらすり抜けよう通過し、

(椅子子女に)あ、ごめんなさい。

どうもー。(と、出口の方へ行く。)

は  
い  
?

え？

何  
か  
?

何  
か  
?

今『めんなさい』って。

言いましたつけ？

言いました。

榎原、なんとなく作業の準備をし始める。

(ぼそつと) 礼服かあ：

小川、ふと考へて、

ああ！ あのかた……、

ト、小川は椅子子女を指差しかかるが、椅子子女は口に指を当てて“シーツ”的ポーズ。

え?  
はい?

あ、私のことは見えないことに話進めてくださいな。

はあ。えつと、あ、浜松のお住まいは?

もう完全に引き払つてきました。住んでたマンションもつぶれちゃったんで。

うわー、お気の毒でした。

津波も被災想定はるかに超えて浜松駅の2キロほど手前まで来たくらいで、もう海側の地域は壊滅的でしたからね。まあ、7年経つたつていってもあつちはしばらく文化だの芸術だのより復興最優先ですよ。

すみません余計なこと訊いちやつて。

小川さんが、謝ることじやないですよ。日本の大動脈とはいえ、自然災害の前には人間はかなわなかつたつてことです。

……。

へんな空気になつちやつたね。

いやいや、私が話振つたから。浜松でもやはり大学の教員を?

いや、浜松市内中心に劇場とか音楽ホールで舞台制作とかマネージメントの仕事を。浜松つて音楽産業が盛んな土地で、音楽の公演も結構多いんですよ。あと、呼ばれればガサさんの舞台だけじゃなく東京だの関東の仕事もこなしてました。

へえ……。

ト、小川、来ている礼服を軽く整える。

榎原、それを見て、

小川さん、さつき外で、後藤さんの法事に参加してきた、って言つてましたよね。

はい。

後藤さんは面識あつたんですか？

高校生の頃いろいろと相談に乗つてもらつてましてね。

オレもです。大学受験の時いろいろと相談に乗つてもらつて。石田さんにオーナーをバトンタッチしてからはあまりここに来てなかつたみたいですが、晩年は石田さんのサポートでちょくちょく顔出してたみたいですよ。…どうでした？ 法事。

ああ、お客様たくさんでござやかでしたよ。でも、今回の二十七回忌で後藤さんの法事に一区切りつけることにしたんだそうです。御親族がおつしやつてました。

：弔い上げつてことか。：つて言うことはこの先、後藤さんの法事はしないつてこと、ですよね。

そういうことになりますね。

後藤さんの顔を知つている人間がまだいるうちは法事してあげてもいいと思うんだけどな。毎年やるわけじゃないんだし。

私もそう思うんですけど。でも二十七回忌までちゃんとやつたつていうのはほんと、丁寧なことですよ。

あー、遠慮しないでオレも行きやすかったな、法事。

そうですよ。私みたいな一般人ですら参列させてもらつたんですから。

うちの古株の教員も何人か行つてましたね。

ええ。あとは有名な美術作家さん、地元の作家、後藤さんにお世話になつたつていう美大の卒業生。卒業生つて言つても私くらいの年恰好でしたけどね。

もう今の若い連中には“後藤仁”って言つてもピンとくるやつらなんていないだろうしな。

あの当時あれだけ秋田のアートシーンで活躍した人なのにね。

寂しいね。

寂しいですね。

ト、入口のドアが開く音。

榎原 あ、橋本やつと来やがつた！

ガラガラ。

榎原 このバカツつーがつつ!!

ト、山口がすつとギャラリースペースに入つてくる。それに続いて椅子女が例のかぶり物をかぶつて入つてくる。

反応する小川と榎原。

山口 誰がバカよ。…あー、雨やだあ…。

榎原 ああっ！メイさん？！

山口 大バカのバラさんもいたんだ。（軽く首だけで会釈）どもー。

椅子女 この人挨拶雑だねえ。（山口を匂つて、）ああ、この人すつごいイイ匂い！！（もう一度匂つて、）カボティーヌのローズジyan。

小川、椅子女を制する。が、榎原も山口も椅子女に動じることはない。

榎原 ごめん、てつきりバカが戻ってきたかと思つて。

山口 それってあたしがバカつて事かしら？ っていうかさつきあたし来てたのわかつてたんなら声かけてよ。

榎原 榎原  
山口 山口

神原 やっぱり来てたんだ！

山口 やっぱり、って？

神原 メイさんのイイ匂いしてたから。

山口 うわっ、言い方ヤラシイッ !!

神原 あ、すまん。あ、いや、そんなことよりメイさん、どうして秋田に？

山口 打合せ。橋本ミシユさんつて人に会いに。いる？

神原 いるにはいるんだけど、いないんだわ。

山口 どっちよ？ いるの？ いないの？

神原 いつもはいるんだけど、今は、いないっていうか。

山口 どこにいるの？

神原 いや、こっちも探してるところなんだわ。

山口 えー？ この時間に打合せさせてほしいって橋本さんから連絡もらつたから前の予定切り上げてわざわざ来たんだけど。

神原 何のために？

山口 今年の冬に秋田でやるアートシンポジウムのゲストスピーカーに呼ばれてんの。そのシンポジウムの窓口ヒコーディネーターが橋本さんなのよ。

神原 そのためにな。

山口 うん。だつて冬までスケジュールびつちりだもの。あと、シンポジウム用に借りてた資料も返しに来た。

神原 確か、メイさんいま住んでるところで…、

山口 ビッグアボー。

神原 だよなー。

山口 ビッグアボーって？

神原 (がっくりと) ニューヨークだよ。

小川 えーっ。

ちなみに椅子女は上手側の椅子に腰かけ、手作業をしている。

神原 マジか!?

山口 マジだ。打合せ終わったらとんぼ返りだ。

（つぶやく）橋本バカツつー…。ベンキ塗るどころの話じやねーだろよ!?

（神原に）先生、この人、誰?

メイさん、ごめん!! オレ、橋本探してくるわ。首根っこひつからえて連れてくる。

（神原に）ちよつ、ちよつ!! この人誰なんですか?

ト、神原、ココラボを飛び出していこうとするが、椅子女のかぶり物に気づき足を止める。

神原 …グハツ!!…んんつつ!?

その声に反応する山口と小川。

山口の視線は椅子女のかぶり物に。

山口 うわっ!! またよ!! なんで中空に浮いてるのよ、これ? もう一つ、気持ち悪いったらないわよー!!

神原と山口、椅子女の頭部、というかかぶり物を凝視しつつも微妙な距離をとりながら椅子女の周りをじりじりと2~3周回る。

糸かなんかで吊つてるの?  
いや、浮いてるみたいだね。

超電導?

日本の文化遺産みたいなこのビルで、そんな電力使つたらここ)のブレーカー落ちるぜ。

…これ、どういうシチュエーション?

じゃあなんで浮いてるのよ、これ?まさかの…オカルト案件?  
…(恐怖をこらえて声を絞り出しながら)かぶり物の呪い。

失つ礼な!!

かぶり物かぶつて座つてるだけでなんでこんな大事になつてるの!?

…なんでそんな物騒なものここにあるの?

…これ、ココラボのオーナーが代々大事に保管してきたものらしくてさ、

…花のかたち、だよね。

…五弁の花、かな。

そうだよ。きれいでしょ。

…(ゴクッ)なんか秘密結社の紋章とか。

違うつてば。

…そういえば、オーナーの代替わりの際このかぶり物のこと)で必ずこう引継ぎされるんだって。

…(ゴクッ)。

…「このかぶり物は、大事に保管すること…」

キヤーッ!!

榎原、小川、椅子女、激しく驚く。

椅子子女 ビツクリしたあ！ もつかい死ぬかと思つた！

で？

三九

それだけつて…。

榎原

50年くらい前ここに出入りしていた人がなんかの目的で作ったものらしいんだけど、詳しい事はわかんない

ちょっとバラさん、あなた躊躇なく手に取ったね。

なんか起こるよ。

椅子女、転がつている刷毛を手に取り、誰にも気づかれないように榎原の顔をなでる。

うわ――――――つ！

うるさいわよ。（内側をのぞき込んで）…あ、ホントだ。

サトウ：「…。の、ごはん？…。

(真顔で)…え

o

時には冗談も言うよ、私。

すごい謎解きが隠されてるかと思った。

これ 誰の名前

作家さんだつたら何か記録に残つてゐるはずだらうからつて、橋本がここのおーپン当初までさかのぼつて調べたんだけどそれらしい情報は出てこなかつた。だとすると忘れもの、とか。

榎原 多分そんなところ。持ち主が現れるまでは大切に保管しとけっていこうことなんだろうと。

山口 謎解決。

小川 オカルト案件は…、

椅子女 蒸し返さなくていいんじやない、この件は。

椅子女ものぞき込み、につこりとほほ笑む。

榎原 あ、そんなことより、ちょっと橋本探してくるわ。

ト、飛び出していく榎原。

かぶり物はほっぽらかし。

小川と山口、残される。

二人、同時に深いため息、一つ。

微妙な間。

山口、かぶり物を手に取り、中をのぞく。

山口 結構丁寧に作ってるんだ。

かぶり物を軽く匂い、

山口 ん？

顔を上げ、ちょっとと思案するような視線を中空に向ける。  
おもむろにさつくりとかぶつてみる。

椅子に腰かけそつと目を閉じる。  
しばらく目を閉じているがふと目を開き、

山口 なるほど。

ト、かぶり物を脱ぐ。それを自然に椅子女が受け取り丁寧に装着。かぶつたかぶり物に手を当て目を閉じる。まるで何かを読み取るように。ふたたび目を開け、なるべく“人間”的視線に触れにくい場所、壁に近い位置の椅子に腰かけて作業を再開する。  
山口、冒頭と同じように懐かしそうに部屋を見回す。

山口 小川  
(部屋を眺めまわして)まんまだ。  
はい!?

山口、不意に立ち上がり背後の壁に近づき壁のあちこちを触りながらつぶさに壁の何かを探している。

山口 あつ! あつた!!

山口、振り返り、今度は床をチェックし始める。その顔は宝物探しや干潟で貝を探している少女のような無邪気な表情である。

山口 これだあ!

再びほかの何かを探そうとする山口。再び壁を調べ始める。

山口 あつた！ ほら！ ここ!! (小川を手まねきし) ほら、ここにペンキ厚くなってるところあるでしょ？  
(壁に近づき山口が示した一点を凝視し、)ええ、ありますね。

山口 ね！ これ、あたし塗ったところ。ペンキなんて塗つたことなかつたからさ、とりあえず白く塗つちやえ！ つ  
て感じで。そしたらね、あたしに見かねたんだろうね、後藤老人がこうやって、

ト、言うや否や床のローラーを小川に握らせ、

壁に色を塗るジエスチャーを手取り足取り、指図する。

そして山口は小川の背後に回り、小川のローラーを握つた手を支えてローラーを動かして、

山口 「こ、うやるのよ。あんまり急いで何度もごちやごちや動かすとペンキが泡立つて塗つた表面がでこぼこになる  
から」 って。

小川 後藤さんって、後藤仁さん？

山口 そう！ あなた、知つてるの？

小川 ええ。昔いろいろお世話になつたものですから。

山口 え!? なになに？ ホント？

山口、完全に小川との距離がとにかく近い。

小川 ええ…。

山口 ね、ね、ね、どんな人だった、後藤老人？  
小川 …どんなつて、高校三年の時に初めて会つて。で…

山口

そうなんだ。あたしも高校生の頃に初めて会つたんだよね、後藤老人に。パパの実家に遊びに来たとき、一人でぶらつとこのあたり散歩してたの。そしたらね、そこ(入口)のドアが開いてて。ここが何やつてるとこかわからなかつたんだけど、「入つていよいよ」って言われた感じがしたのよ。

誰に？

ドアに。つて言うかこの部屋から聞こえてきたのよ。

「アリでいいよ」？

アーティス **おしきん** がんば  
にか勤たしも「ロロロ手云つてた。

…へえ。すごい積極的ですね。

最初は全然うまく塗れなかつたんだけど後藤老人が塗り方教えてくれるとね、どんどんキレイに塗れるようになつていくの。うれしかつた…。

三〇

ちょっととくたびれた感じの部屋が、この白いペンキをちょっとと塗るだけで劇的に変わっていくのね。：なんていうのかな、曇った空の隙間から光が差してくるつて言うことあるじゃない？ あんな感じ！ 塗れば塗るほどそれがどんどん広がつていって。その時こう思ったの。自分の能力で空間を作り上げていくのつてすゞ、いことなんじやないかって思つたのね、その時。

わかるわあ、その感じ。

卷之三

あたしインスタレーションにすごく興味持つようになつて、仙台から女子美に入つて立体アート専攻したのね

もう毎日が楽しくて楽しくて。葉っぱ見ても、石ころ見ても、アクセサリー見ても、人見ても、ビル見ても、

もう毎日が楽しくて楽しくて。葉っぱ見ても、石ころ見ても、アクセサリー見ても、人見ても、ビル見ても、何見ても楽しくて楽しくて、この世界全部があたしの作品の素材なんだ、って思えてきたの。

山口

アートは楽しいよー。頭ひねればひねつただけ、手を動かせば動かしただけしつかり形になつていくからね。動かさないとだめ。絶対だめ。よくさ、

“生みの苦しみ”なんていう人いるじやん。あれつてあたしの中では絶体存在しない概念なのよ。あたしに言わせたらそう言う時は迷わず“案ずるより産むが易し”じやんって思うわけ。

小川 山口

全然もうからない。インスタレーションなんて大量生産できるものじやないし、あたしがどんなに好きでもインスタレーションできるスペースがなきや作れないし。だから普段はアクセサリーとかオブジェつくってる

の。

椅子子女

(山口をじつと見つめて)へえ、この人シックな見た目と違つてこんなキラキラしてかわいいアクセサリー作るんだあ。わたし好きかも。

小川

作品作つたらあたしのマネージメントしてくれてるギャラリーすぐに売つてくれるしね。

椅子子女

私は趣味の延長線上でやつてたから全部自分でやらなきやなんなかつたの。大変だつた…。

小川

あたしの名前を背負つた作品が日本だけじゃなく世界に広がつていくのよ。この地球上にあたしの作品がインスタレーションされていくのよ。めちゃくちや、いいよね。…あー、しゃべり疲れちゃつた。のどかわいたな。…こここの二階、カフェだったよね？ ちょっとお茶してこよつと。

ト、ギャラリーから出でいく山口。

小川

圧倒されました。情熱的というか、押しのが強いというか。

椅子子女

うーん、すごいよね、山口さん。

小川 山口

山口さんって言うんですか？

椅子子女 (かぶり物に手を当てながら山口の残した想念を読み取る、というかなんというか…うん。：山口メイ子、

つていうんだって。すごい有名な美術作家みたいよ。

面識あるんですか？

小川 椅子女 ううん、これ(かぶり物)が教えてくれた。

小川 またまたあ、本当ですかあ？

椅子子女 ほんとほんと。さつきこれかぶつてくれたじやない、彼女。でもさ、ああいう人のこと天才って言うんだろ

うね…。

小川 天才かあ…。うらやましいですね。

椅子子女 あんなんなつてみたかったな。

小川 同じく、です。私、高校生の頃から美術が好きで、現代美術の作家になりたかったんですよ。

椅子子女 へえ、意外。そんなふうに見えなかつた。

小川 ですよね。いや、現代美術作家っていう響きにあこがれてたつて言つたほうがあつてるかな。

うん。

小川 何やつてもダメな男でね、私。勉強口クにできもしないくせに努力もしない、しかも絵も造形物もヘタクソで。

夢はかなわなかつたけど、今でもココラボやここに関わる人を中心応援しててるつもりです。

椅子子女 私ね、後藤さんと同世代なのよ。私もよくここに来て、お仕事の話したり、他愛もない話したりしてたわ。

あの頃一番楽しかつた。

小川 え？

椅子子女 私も一度だけここで作品展やつたのよ。これの。

ト、手作業で作つていた作品を見せる。

が、その手元には何もない。何もない手元を見ながら椅子子女と小川は話に花を咲かせる。

小川 これは。  
椅子子女 つまみ細工っていうの。江戸時代くらいからある伝統工芸なの。  
小川 へえ、キレイなもんですねえ。  
椅子子女 でしょ。（ト、手作業を続ける）  
小川 あ。（かぶり物を指差して）これってもしかして、（今度は作品を指差して）これ？  
椅子子女 そ！ つまみ細工の妖精ですっ♡  
小川 …あ、はい。  
椅子子女 そういう反応になるよねー。イタイお姉さんだよねー。でもね…、根っから好きなのよ、こういうの！  
ふと、小川、椅子子女をじっと見つめる。  
小川 趣味でやつてらっしやるんですか？  
椅子子女 かぶり物？  
小川 じやなくて、つまみ細工。  
椅子子女 ああ、いちおう、仕事で。  
小川 作家さんだったんですね。  
椅子子女 就職した頃に友達から誘われてつまみ細工始めたの。あんまり体も丈夫じゃなかったから体育会系の趣味苦手でね。  
小川 ふーん、そう見えないけどな。  
椅子子女 こう見えて実はか弱いのよ。  
小川 フフ。  
椅子子女 なにがおかしい！  
小川 いや、なにも…。

椅子子女

意外とはまっちゃったのよね、つまみ細工つくるの。作品も増えてきて楽しくなってきたころ、会社の同僚と結婚することになつて会社辞めちやつたの。

小川 椅子女

そだつたんですか。

でも細工づくりだけはやめなかつた。大親友の子が結婚式を挙げた時にも髪飾り用にプレゼントしたりしてね。そしたらね、その子だけじやなくその髪飾り見た結婚式のお客さんも口々につまみ細工の髪飾りほめてくれて。誰が作ったのかもわからない作品をよ、ただただ好きで作つてたものをこんなにほめてもらえるなんて思いもよらなくてさ。

小川 椅子女

続けるつて大切なことですよ。いつか認められる日がきつと待つてゐるから。

小川 椅子女

そうなのかしらね。

小川 椅子女

そうですよ。

小川 椅子女

で、そのあと再就職とかパート勤めも考えたんだけど、つまみ細工作家つてのもいいかなつて思つてこの道に。

小川 椅子女

順調でしたか？

小川 椅子女

いやいやいや。そんな甘くない。それこそ、ここで作品展やつたときにたまたまふらつと立ち寄つたお客様からこんなことと言われちやつてさ。

小川 椅子女

どんなことを？

小川 椅子女

聞く？

小川 椅子女

…あ、やめよつかな。

小川 椅子女

話します。「趣味でこんな作品作れるなんてすてきだわ。プロになつたらいいのに。」つて。

小川 椅子女

趣味つて言われちやつたよお…つて。きつかつたあ。

落ち込みました？

ショックだつたけど、もしそこで落ち込んでいたらあとは趣味の人に戻るしかないでしょ、だつて自分で

これを仕事にするつて決めたんだもん。これで生きていくんだけつて決めてたんだもん。自分を磨いて磨いて前に進むしかないじやない。いまはもう、悟りの境地にたどり着いたわよ、ハハハ。

小川 なんか神々しく見えてきました!! ちょっと手、合わさせてもらつていいですか?(ト、冗談交じりに椅子女 へ合掌する。)

椅子女 ああ、そんなことされると気持ちが落ち着くう。

小川 ヘンなこと聞いていいですか?

椅子女 なに?

小川 山口さんも榎原先生もあなた…、あ、名前。私、小川正隆つていいます。お名前うかがつてもいいですか?

椅子女 麻由子、(かぶり物を取つて、内側に書かれた名前を指して)サトウ。佐藤麻由子。

小川 ああ、サトウさん! そうでしたね。

椅子女 お餅屋さんじやなくてごめんね。

小川 ハハハ。

椅子女 つまみ細工のマユ、略して…、ま、そこまでいいか。マユでいいよ。

椅子女は佐藤麻由子といふらしい。

小川 マユさん。…なんで山口さんも榎原先生もマユさんのことあからさまに無視するんでしよう。かぶり物のこと はいじり倒してるくせに。

麻由子 見えてないんじやない、私のこと。

小川 はい?

麻由子 見えてないんだよ。

小川 見えてないって、そんなことがありますか?

麻由子 うん、おそらくあなた…、

入り口のドアの音が聞こえる。

小川 あ、橋本君？

榊原、戻つてくる。

違つた。

ちがうつて？

橋本君かと。

ああ…、(軽く匂つて)あれ、メイさんは？

2階のカフェに行かれました。

麻由子、かぶり物を脱ぎ椅子に置く。そして榊原と小川の間に立ち、会話のあいだ中、榊原に向かつて妙な動きをしてみせる。

榊原と小川は面と向かつて会話している。

榊原は普通通り会話しているが、小川はなんだか話しづらそうである。

そうか。

橋本君みつかりました？

やつと連絡取れた。取れたっていうか、電話つながつただけなんだけど。

どこにいたんですか？

それがわかんないんですよ。

榊原 小川 榊原 榊原

小川 榊原 小川 榊原 小川

麻由子 小川 (小川に)ね。

(麻由子に)全然見えてないんだ。

小川 榊原 そ、居場所が全く見える。この辺であいつがいそなところは回ったんだけど、  
麻由子 すつぐ近くに居るから大丈夫よー。

小川 (麻由子に)ホント?

小川 榊原 ホントです。あいつのいそなところ、いそなところ…

小川 麻由子 (榊原に)じやなくて、近く…、

小川 麻由子 シツ! もう少し黙つてようよ、おもしろそらだから。

小川 麻由子 (麻由子に)声も聞こえてないの?

小川 榊原 聞こえてないっていうか、聞いてないっていうか。通話つながったかと思つたら『ふあい……グ～……』って。  
あいつどつかで居眠りぶつこいてんだ。もういつぺん探してきます。メイさん戻つたらちよつと待つて  
もらつて。

ト、再び飛び出していく榊原。

椅子に腰かける小川と麻由子。  
わずかの静寂。

小川 :見えてないってどういうことなんですか。

小川 麻由子 住む世界が違うから見えないのよ。

小川 住む世界が違う。

小川 麻由子 そう。裏を返せば、お互が見えてるあなたと私は同じ、というか近い世界に住んでるっていうことなのかもしれないわよ、ハハハ。

間。

小川 : 実は私、子供の頃から敏感な方でしてね、こういうの。

麻由子 おっ！ そうなの？ なんかうれしいわあ。

小川 麻由子 性格なんだと思うんです、相手にされてないっていうか、無視されてるっていうか。

小川 麻由子 ああ、そっちのほうね！ なるほど、なるほど。 : うーん、いい感じやない、楽で。気遣われなくって。  
いや、そういうんじやなくて、なんていうか、意識的に無視されているっていうか。

小川 麻由子 それは思い込み過ぎ。あなた、(小川を見て)相当くたしてるね。

小川 麻由子 くたしてる?

麻由子 うん。くたしてる。

小川 麻由子 どういうことですか。

小川 麻由子 くたす。く・さ・つ・て・るっていうこと。くたさなくともいいのよ。あの二人、もし私を意識的に無視してたとしても損もないけど得もないでしょ。人がどう見ているかって深読みしそぎて心をくたしている時間もつたいないよ。

小川 :

小川 麻由子 時間は有限。普通に明日が来るって奇跡みたいなものなんだから。

小川 :

小川 麻由子 出来ないことにクヨクヨしても始まらないから、その時できることしつかりやるって考えに切り替えたん

小川 :

麻由子 (軽く匂つて)…あ、メイ子ちゃんきたわよ。

山口入つてくる。

山口 おいしかった。(周りを見まわし)あれ、誰もいないんだ。…うーん。

山口 小川と目が合う。が、特に何もない。

小川 榊原先生が、ちょっと待って、つて。  
山口 そうなんだ。

所在なげにたつている山口。ちょっとイライラし始める。

山口 あー、もう時間ないんだけど。

小川 あの、ちょっとかがつていいですか?  
山口 なに?

麻由子 やめときなつて。

小川 あなたさつき、ご自身の作品が世界中に広まっていくことをめちゃくちゃやいって言われましたよね。地球上に自分の作品がインスタレーションされていくのがうれしいって言つてた。それってあなたにとつて、それから世の中にとつてどんな意味があるんでしようか。

榊原、部屋に入つてくるが、中の様子に躊躇し、声が掛けられない。

山口 意味?

小川 たとえば、たとえば、かつてあんなに活躍した後藤さんの存在ですら、今の人にはすっかり忘れられてしまつて。私にとつてこれは何よりも悔しいことなんです。

で。

一生懸命作品作つたり、自分の表現を磨いているのになかなか陽の目を浴びない人たちがこの世にはたくさんいます。そんな中にもびっくりするような、目の覚めるような、心搖さぶられるような作品を生み出す人もいます。

ええ、そうね。

山口

小川

私最近こう思うんです。美術・芸術というものは『詠み人知らず』になってこそ世の中の役に立つんじやないかって。誰その作品だ、時価評価額がいくらだ、なんて主張しているうちはまだ、世のため人のためになつていないんじやないかって。

それって、なに批判？

山口

数千万、数億円の作品が今ここにあつたとして、興味のない人にしてみればさほど価値の感じない、ただの一枚の絵です。それよりだつたら、世間に回っている工業製品だと日用品のように風景になじむこと、消費されていくものの方に価値があるかも知れない。『詠み人知らずのプロダクト』の方が数倍の価値があるかもしれない。

山口

ちよつと何に対していらだつてるのか全然わかんない。あなたの言う『詠み人知らずのプロダクト』は、大量消費の果てのゴミになつていく可能性が高いわよね。あたしたちが生み出してる作品はおいそれとは無駄になんかならないわ。なぜならそれは美術作品としての価値があるから。そもそも美術作品の価値と大量生産の商品を同列に考えるのには無理があるわ。あなたはそれが決定的に理解できていない。単純にそういうことなんじやない。冷静を欠いた極論をぶつけられても答えようがない、あたし。

小川

あなたのように大して苦労もしないでサクサク作品が売れている人間には理解できないでしようが、悔しいんです。地道に頑張つて作品をつくってきた人の存在が忘れられることが。そんな人が忘れられるのに著名な作家の名前を背負つた作品だけが世の中から価値を与えられて残つていくことがつらくてやりきれないんです。著名であることと無名であることとでどうしてこんなに作家の価値が違つてくるのか…。

麻由子

ちょっと！言い過ぎ！

山口

甘いわ、甘すぎるわ。そんなのこの世界では当たり前のことよ。アマチュアがいればプロもいる。プロの中でも売れる人と売れない人がいる。売れる人は売れるなりの、売れない人は売れないなりの理由があるのよ。あたしは、アートが仕事なの。アートに生きてアートで生計を立ててるの。名前を売つていかなきやなんないの。作品を売つていかなきやなんないの。大量消費の「主張しないもの」のような価値のものじやダメなの。一個が何万、何十万、何百万のクオリティーの一点ものの作品をつくり続けていかなきやなんないの。それがあたしたちプロフェッショナルの存在意義なの。わかる？ 大量消費の価値の低いものがどんどん世の中に溢れてくる方があたしにとつては不安でしかないわ。

榎原、割つて入る。

榎原  
小川

地震のあつた日のこと昨日のことのように思い出すんですよ、オレ。小川さん…オレも話していいですか？あ、ええ…。

千秋公園のお堀端の芸術劇場のホールに教授とオレとゼミの学生でちょうど舞台制作の演習やつてたんですよ。突然、通信端末の地震警報に『遠州灘沖にて地震発生。大きな揺れと津波に警戒』って出た。その後すぐには津波警報が出た。建物の倒壊、津波被害、火災。一緒に汗水流して頑張つてくれた仲間のなかで死んだやつがいます。ホールの名スタッフでした。いい腕をもつたヤツでした。寝ても覚めてもホールや舞台への情熱を語つていた男でした。：何物にも代えがたい一人の仲間がこの世からいなくなくなりました。そんな彼も名もない表現者でした。目に見えるもの、形あるものもいつか滅びるんです。いや、この先100年200年は残るかもしれない。でもこの地球が最後バーンッていけば、何百万何千万何億円のものも木つ端みじんになるんだわ。もしかしたら、明日にでも大津波で一気にかつさらわれるかもしれない。

人間の営みは儂いものだつてわかってるもんで、自分が生きているうちに自分が生きた証を一つでも残したいつてがむしやらに物事に立ち向かって向かって向かいまくることで、表現者はこの世の中に存続できてい

るんだと思うんですよ。

小川・山口  
…。

ごめんね、ちょっと興奮してしまった。…オレね、実はココラボに来るのものすごく苦手でね。

山口  
なんで？

ここって、とんでもない才能とセンスを持つた人がわんさと集まつてくる場所だもんでね。美術と格闘しながら自分を高めるための鍛錬を続いている連中がオレにはまぶしすぎてね。

でも先生だってあれだけ素晴らしい作品を生み出せるじゃないですか。

小川  
山口  
山口

どこが素晴らしいですか？ 小川さんどこにあるあの絵のどこにそんな価値があるついえますか？

バラさん…。

間。

榎原

ごめん、大きな声出しちまつて。…先週ここでやつてた美大OBの個展見ましたか？

小川  
あ、見逃してました。

榎原  
榎原  
小川  
榎原  
小川  
榎原  
小川  
榎原  
小川  
…。

彼ね、大学卒業してから秋田の大手のお菓子屋さんで紙媒体の広告やパッケージデザインの仕事してるんです。確かにアートの文脈の中では仕事をしていることになるわけだけど、でもそこには彼の名前が出るわけじゃない。でも、彼はその才能とセンスを仕事にしつかり生かしてる。

小川  
榎原  
二、三ヶ月前、横手でやつてたあるイベントに参加したんです。参加者にサービスで飲み物とちょっとしたお菓子が配られていた。たまたま私の座っている後ろのテーブルが親子連れだったんだが、こんな会話してた。「うわー、このワンコかわいい。あ、パパの方についてるほうがカワイイな、ねえ交換してよー。」って。それはもう絵に描いたような幸せ家族の風景だよ。何の話してるのかなって、ふとその家族見ると、その手元に小袋のお菓子があつた。パッケージに秋田犬がデザインされているお菓子。

山口  
榎原

それって、  
そう。美大O.B.の彼が勤めてるお菓子屋さんの製品。しかも、彼がパッケージデザイン手掛けたお菓子。彼の手掛けたパッケージがいままさにこの家族の幸せの真ん中にあるんだよ。それが無性にうれしくて、誇らしく感じてね。涙が止まなくなっちゃった。オレの手元にもそのお菓子があつたんだけど、見てもパッケージにはデザイナーの名前なんて一文字も入っちゃいない。たまたまあの会社のデザインは彼がやっていることをオレは知つてたけど、その会場にいる何百人ものお客さんはそれを知つている人なんてほとんどいなかつたはずだ。…まさしく詠み人知らずの仕事なんだわ。その一方で、企業のリビングのコレクションとして作品のタイトルと作家名が書かれたプレートと一緒に応接室に掛かつてなかなか一般の目には触れることがない何十億円のアート作品も存在する。どっちがこの世の中にとって本当の意味で生きたアートなのかなって、考えちゃってね。

山口  
榎原

どっちもだよ。アートの存在の仕方は一つじゃないから。アートかくあるべし、なんて発想、悲しいじやない。オレもそんなことを学生に教えるんだけどさ。ときどきそんなことがふと頭をよぎるんだわ。

山口  
榎原・山口

そんな青臭いこと言つてるうちはまだ現役でやつていけるわ。  
ハハハハハ。

山口

バラさんだつて、ステージつていうフィールドです”い作品いっぱい作つて來たじやない。しかも、舞台でがんばつている人の努力が報われるようつて、アートマネジメントの仕事もしてきたじやない。最上級の縁の下の力持ちだよ。

榎原

ありがとう…。

：知つたような口きいて、申し訳ありませんでした。

小川  
榎原

いいのいいの。こっち側のオレたちだつて答えだせないことなんだから。ね。

山口  
小川

うん。とつてもむずかしいこと。  
すみませんでした…。

間。

ところで、今回のアートシンポジウムってどんなことやるの？

過去に活躍した地方在住作家の発掘と作品の検証をするっていうんだけど。

へえ、なんか面白そうだね。

この細工作つた人の仕事、シンポジウムのテーマに選んだんだ。今から50年位前に活動してた作家。

胸元につけていたつまみ細工のブローチを外し、榎原に見せる山口。

山口 これ、震災の直後に日本の生活あきらめてニューヨークに移住した日本人の友達から譲つてもらつたの。すぐ

く纖細で、素敵なものだから、私が気に入るだろうって。その子も東京に住んでる友達から何点か売つても  
らつたんだってこの作家さんの細工。

これって：

榎原 小川 つまみ細工、ですね。

山口 よく知ってるね。そう。つまみ細工。

榎原 そうかそうかこれがあの作家の…なるほど丁寧な仕事してるなあ。

山口 手にした瞬間この小さな細工の世界に惹きこまれてね。すぐにこの細工をつくった作家さんのこと調べ始めた  
の。この細工が渡ってきたルートを遡つたら秋田で制作活動していた作家さんだっていうことが分かったの。

ト、トートバッグの中から資料を出し榎原に手渡す。

榎原 山口 なるほど、つまゆみ、か！ うわ、懐かしい。これ、オレが書いてメイさんに送ったレポートだ！

そう。あの時は本当に助かつた。バラさん浜松から秋田に引っ越したっていう話聞いてたから迷わず連絡させ

てもらつてね。

いや、このつまゆみ調査のおかげでオレも秋田のアート界隈の人と仲良くなれたんだよ。オレにとつては山口メイ子さまさま、つまゆみさまさまだよ。

榊原

麻由子、手を止めて反応。

ココラボによく来る常連さんに訊くと、秋田でもいろんな人が持つてるっていうんだよね、つまゆみの作品。うん。

本名も素性もほとんど謎なんだけど、たくさん的人に作品が愛されてるんだわ。まさにつまゆみって作家はその存在の中に、さつき小川さんとメイさんがそれぞれ言つてた真逆みたいな二つの理屈を、その姿勢と作品の中で無理なく矛盾なくちゃんと共存させられてたんだよ。ホント、あっぱれな作家だわ。

麻由子、軽く照れるも、また手を動かす。

結局どの程度まで調査できたの？

うん、バラさんが言つた通り、すぐ作品点数の多い作家さんだつたんだけど、秋田や国内だけじゃなく、海外でもいろんな人が彼女の作品を持つてて、普段用とか冠婚葬祭、フォーマルな場面のアクセサリーにして使つてたつていうことがわかつた。そして…どうも若くして亡くなつた女性作家さんであることもわかつた。亡くなつたのつて、

亡くなつた年だけははつきりしてゐる。2025年。橋本さんがたまたま見つけてくれた後藤老人の当時のダイアリーに書いてたの。（資料のメモを読んで）“2月3日。春の日。つまゆみさん亡くなる。雪道を歩いて葬儀場まで行つた。たくさんの花と一緒に棺の中におさめられた彼女は少し笑つてるような顔で眠つてゐる。彼女がいつも付けていた香水がほんのりかおつてゐる。かおればかおるほど、いろんな思い出がよみがえる。

小川

榊原  
山口

榊原  
山口

とにかく涙があふれてくる。つまゆみさんのいちばんの宝物と、そして香水の空箱を形見に分けてもらう。

あ、ここに貼つてあるのその香水の空箱？… „カボティーヌ ローズ“。

（自分の手首を匂つて）この香り。

麻由子に目を遣る小川。微笑む麻由子。

不思議だったんだよね。  
なにが？

山口 榊原  
山口 この秋田で、無名のニックネームみたいな名前の作家の作品がその魅力だけでしかも人づてでアメリカまで届いたんだよ。すごくない？

山口 榊原  
山口 すごいね。奇跡だよ。

後藤老人のダイアリーに書かれてたつまゆみさんの宝物つていうのが何かはわからなかつたんだけど、香水は今も売られてるから、せめて彼女の香りをまとつてみたら何か見えてくるんじやないかって思つて、私ずつとこの香水付けてるんだ。カボティーヌ・ローズ。カボティーヌ、„無邪気な妖精“っていう名前の香水。

榎原  
無邪気な妖精、か…。

麻由子に目を遣る小川。ほほ笑んでいる麻由子。

麻由子 (かぶり物を指差した)た・か・ら・も・のつ

小川 ああ。

麻由子 (つまみ細工)の中に取り込まれちゃつた„マユ“だから、„つまゆみ“意外と安直な作家名でしょ。ハハ。

なるほど!!

はい?

あ、いや、あのそれが、…(ト、ネタをばらそうとする)

シーツ。フフフ。

(頷き)なんでもありません。

このココラボラトリ一つて、つまゆみさんみたいな作家とか、刺激的でとんでもない作家とか、それからものを作る事、表現することを心底楽しんでる人たちにとつて昔から最高の居場所だったんだろうね。

うん。名前やステータスだけじゃなく、最高の居場所をがむしやらに守ってきた人の思いとか情熱の記憶も才

レたちつないでいかなきやな。

この場所をつくつて守つて来てくれてありがとう…。

一日でも長く生きなきやね。

はい。長く生きなきや…。

榎原・山口・小川 ハハハ。…、

間。

榎原と山口の時間が止まっているようだ。

あれ、目が…。  
どうしたの?

マユさんがちょっとぼやけて見えて。  
そつか。ね、からだ、大丈夫?

え?

小川 麻由子 小川 麻由子

小川 麻由子

小川 麻由子

小川 麻由子

麻由子 だつて私のこと見えてたんでしょ。  
小川 ええ。  
麻由子 死んでる人間見えてるんだもの。…そういうこと。  
小川 え…？ ああ、そういうことか…。  
麻由子 そういうこと。  
小川 : 実はドクターからは年が越せるかどうかって言われてて。だからマユさん見た時、マチ、あ、死んだカミさん  
がいよいよ迎えに来てくれたのかと思って。  
麻由子 奥さんと似てるの、私？  
小川 (ちよつと凝視して)よく見るとあんまり似てませんでした。でも雰囲気がなんとなく。あれ、さつきより目がかすんできた…。  
麻由子 ううん、あなたと私の住む世界の距離がちよつと離れてきたんだよ、たぶん。  
小川 はい?  
麻由子 さつき言つたじやない、「長く生きなきや」つて。  
小川 はい。

ふたたび榎原と山口の時間が動き出す。

榎原 : 小川さん、一つだけ言わせて。さつき、メイさんのこと、大して苦労もしないでサクサク作品が売れている  
人間って言つてたけど、あれ違うよ。彼女、苦労とかストレスに対する感受性がちよつと鈍い質たちで、実は相  
当苦労してきた人だから。この山口メイ子だってもとは詠み人知らずの一人だつたんですよ。傍からは楽観  
的に見えるけどね。それは、オレと、それからモリ森尾の二人が保証しますよ。(山口に)ね?  
山口 なんでモリ?

(流して)…でないと世界中飛び回る現代美術作家になんかなれないですって。

：小川さん、ごめんね。あたし、なんか人との距離感の取り方おかしいし、変なスイツチすぐ入っちゃう人間みたいだから。

全然平氣です。

だけどさバラさん、私そんなに鈍いかなあ!?

自分の一言一語が、うるさいかな、のよ、二つ、三つの一言は。

あ、じやあバラさんのガサツとおんなじか。

おはおは、ひでえ言へようだなあ

八八八八。

あー、それよりも橋本どうしたよ。どつかで死んでんじやねーのか?

大丈夫、生きてるよ。向かいの駐車場に停めた車の中で雨音聞きながらお昼寝してたか

(麻由子に)ホント?

迎えに行こうとする小川。麻由子、それを止めて

寝かしといたら。もうじき来ると思うから。

はい

うん、待つてもしようがねから、みんなで片付けちまうか

ト、脇の段ボールの中から化学防護服を取り出し小川と山口に手渡す。

着ろ、と。

5 -

小川 榊原 うん。着ろ、と。  
山口 榊原 ペンキを塗れ、と。  
榊原 うん。塗れ、と。

一同、笑う。小川と山口、化学防護服を着ながら、

舞台のスタッフさんもこういうの着るんですか？

いやいや、さすがにそれはないですよ。それぞれ動きやすい格好で作業します。プラス、仕込みの時はヘルメットと安全靴はマスト。

工事現場じやん。

そう、工事現場なのよ舞台の仕込み作業って。危ないんだぜ舞台って。

あんな夢売る場所なのにね。

そ。

すげー。

公演終わったらあの舞台装置ってどうなるんですか？

基本、廃棄！

小川・山口 もつたいない！

かさばるし、保管も大変だし、第一、同じ演目いつやるかなんてわかんないでしょ。舞台は、まっさらにならないと次の作品のセット組めないでしょ。前へ進むためには未練なく全部バラシて廃棄。

なんかエコじゃないしもつたいないなあ。

そういうことも必要なのよ。

ト、言いながら小川と山口、着用完了。

榎原 じゃあ、詠み人知らずの仕事にかかりますか。

小川・山口 はい。

(山口に)…防護服、意外と似合いますね、山口さん。

山口 はい? どうして私の名前?

小川 あつ! あの人:いや、あのかぶり物が教えてくれました。

山口 ……。ハハハハ!! まさかあ!…って、また浮いてるう!!

榎原 またかよ、ちゃんと寄せとけよ、つたく。

ト、麻由子の頭からかぶり物をスポンと抜き取つて麻由子の膝に乗せる。

麻由子、かぶり物を大事に抱える。

山口 今さらだけど、お名前…、

小川 あつ、小川と言います。小川正隆。

山口 改めまして、山口メイ子。5月生まれだからメイ子。意外と安直な名前でしょ。ハハハ。

小川と麻由子、クスっと笑う。

山口 やる気でてきたあ!! バラさん、塗り終わつたらここにサイン入れようか? 白い壁だからサイン映えるよ!!

榎原 それじや詠み人知らずの仕事になんないでしようが。あ、でもサイン入れるのもありだな。ハハハ、明後日からの展示、見ものだぞ。

山口 え? 誰の展示?

榎原 モリ森尾。

山口 榊原 小川 山口 小川

続きますね、雨。  
うん。

ト、榎原と小川はゆるゆると、そして山口はやる気満々でハケやローラー、ペンキ缶、ローラーべケットなどを手にする。すると、再び雨の音が強くなる。麻由子、かぶり物をかぶる。

山口 榊原と小川、固まる。

山口  
ひ・み・つ。  
榎原、「ヤバい！」という表情を浮かべる。  
たっぷり溜めて…、

森尾おーーーっ!! ハハハハハ! それでさつき森尾の名前出てたんだ。ウケるーーつ!  
展示するなんぞ 100万年早いわーっ!  
山口さん、モリ森尾さんとはどういうご関係で?

小川

山口

榎原

小川

榎原

小川

榎原

“卵の花くたし”？

この時期の長雨を指す季語。

せつかく咲いた卵の花を腐らせてしまう程の長雨っていう意味。  
へえ…。

さ、やつちまいましょう。

一同うなづく。

そして壁に向かつてハケやローラーを構える。

ストップモーション。

麻由子  
しとしとしと…しゃばしゃばしゃば…わらわらわら…

雨は降り続ける。

唯一、麻由子は動いている。手作業を続けている。